

他出者の還流可能性に関する一考察

——青森県出身首都圏在住の若者の事例から——

首都大学東京大学院 成田凌

1. 目的と背景

2010年代の条件不利地域では、集落の消滅が喫緊の事態である。また近年の過疎研究では、他出者の還流可能性や地域志向の検討が要請されている（山本 2017）。そこで本報告では、青森県出身で首都圏在住（経験）のある若者の事例から他出者の「還流可能性」を検討することを目的とする。

青森県は、主産業が農林水産業であること、有効求人倍率が低いことなどの影響から、現在でも本人の定住意志の有無に関係なく首都圏での就職を迫られることも少なくない（李・石黒 2008; 石黒ほか 2012）。他方、かつて「出稼ぎ王国」と呼ばれた青森県には大量の出稼ぎ者がいたが、彼らは首都圏への出稼ぎを生活サイクルに常態的に組み込むことで、地元で暮らし続けてきた。このように長期間に渡って地元を離れる生活を強いられても出身地に戻ってくる出稼ぎ者の生き方や考え方は、家業関係なく「家」を継承しようとする現代の青森県の若者の志向性にも垣間見られるとされる（山下ほか編 2008; 作道 2011; 羽渕 2016）。

2. 方法

以上のように出身地への定住／帰郷に対する意識が強く、また転入／移住者の多くが U ターンとされる青森県（出身者）を事例とすることで、他出者の還流（不）可能性に焦点を当てて議論ができると構想し、対象を選定した。本報告では、2013年以降断続的に実施してきた青森県出身首都圏在住者への聞き取り調査の結果のうち、（最初の調査時点で）20歳代～30歳代の事例を用いる。なお、本調査・研究は「首都大学東京研究安全倫理委員会」の承認を得て実施している。

3. 結果と結論

たとえ首都圏で長期間暮らしていても、次第に同郷出身者の知人や友人をつくろうとしたり、いざれ戻ろうとしたりしていた。また、青森県出身首都圏在住者のなかには、常に出身地（津軽）の動向を気かけ、首都圏（東京）に居ながら出身地への貢献や将来的な還流を思案する（東京津軽人）と呼ぶべき心性がみられた。同様の傾向は、学卒直後に他出した若者の地元意識を分析した山口（2012）でも指摘されている。同時期に上京した友人が既に戻っていたり、自身も強く帰郷を意識していたりと、出身地は意識的にも実生活的にも常に傍らにあるものだという。

以上を勘案すると、地域間の人びとの移動を扱う際、出身地との関連を視野に入れて主観的・連続的・循環的に捉えていく必要があるといえる。そして、このような観点から条件不利地域の持続可能性も議論される必要があるのではないだろうか。

文献

石黒格ほか、2012、『「東京」に出る若者たち』ミネルヴァ書房。

李永俊・石黒格、2008、『青森で生きる若者たち』弘前大学出版会。

作道信介ほか、2011、『「ホールドとしての出稼ぎ」の展開——故郷で暮らす方法』『津軽学』津軽に学ぶ会、6: 112-118。

羽渕一代、2016、「現代的イエ意識と地方」川崎賢一ほか編『〈若者〉の溶解』勁草書房、85-109。

山口恵子、2012、「大都市に就職した工業高校卒業生の地元意識」石黒格ほか『「東京」に出る若者たち』ミネルヴァ書房、195-227。

山下祐介ほか編、2008、『津軽、近代化のダイナミズム』御茶の水書房。

山本努、2017、『人口還流（Uターン）と過疎農山村の社会学〔増補版〕』学文社。